

## 代理見合い

とんだ玉三郎

滝川英子は、近所の洋菓子屋の前で、偶然、上村美佐子と出会った。美佐子は女の子を連れている。美佐子の娘の敦子と英子の娘の詩織は、小学校の同級生だった。学校では英子と美佐子はいっしょにPTAの役員をやっていた時期があった。それから数年して上村一家は、山の手のほうに引っ越していったが、世話好きな人がいてPTAの同窓会を時々、開催するので付き合いは続いている。

英子に気が付いた美佐子は気さくに声をかける。

「あら、滝川さん、お久しぶり。この近所に用事があったの。娘が『それなら苺屋に寄って、子供の頃食べた苺ケーキを買ってきて』いうので、買いにきたの」

「そうなの。苺屋の苺ケーキは、昔から評判だったものね」

美佐子は英子の視線が連れてくる孫娘に注がれていることに気付き、紹介した。

「この子、敦子の娘というか、私の孫よ。恵美ちゃん、ご挨拶なさい」

「中山恵美です。こんにちわ」

「お利巧さんね。いくつ？」

恵美が答えようとする前に、美佐子が言った。

「この春から小学校。春休みなので娘が帰ってきたの。孫の成長って早いわね。やっぱり孫は可愛いわよ」

英子にとって、グサツと刺さる一言であった。敦子は小学校の教師をしているので春休みを利用して娘を連れて実家に帰ってきたのであろう。

英子は帰って、夫の徹に言った。

「シヨックなことがあった」

「なんだ。シヨックって」

「今日、珍しい人にあっただわ。苺屋の前でばったりと詩織の小学校の同級生だった子のお母さん、上村さんよ」

「上村さんは随分前に山の手のほうに引っ越したんじゃないの」

「この近くまで来たので、娘に頼まれて苺屋の苺ケーキを買いに来たっていう

の」

「それがどうして、ショックなんだ」

「この春、小学校に入るといふ孫娘を連れてくるのよ。片や、小学生の孫、こちらは未婚、独身よ。この差はとんでもなく大きいわ」

「大げさだな。また、その話か」

詩織は、婦人服販売の会社に勤めており、親と同居している。三十七だが、あと三ヶ月でまたひとつ年をとる。

「もう、四十に近いのよ。完全に危険水域よ。いや危険水域以下よ」

詩織は仕事に打ち込んでいるが、婦人服を専門に扱う職場なので仕事を通じての男性との出会いもあり期待できない。もともと、大学生の時に熱烈な恋愛をしたが、ちよつとしたことで破局を迎え、一時、男性不信に陥ったこともあった。しかし、仕事は順調で、小さいながらひとつの店舗の店長を任されて、三人の正社員と数人のパートさんを使っている。

「親が気をもんでも、本人がその気にならないとどうにもならないよ」

「自分の娘のことなのに、よくそんな評論家のようなことが言えるわね」

徹はこれ以上言々と英子がヒートアップするのは確実なのでダンマリを決め込んだ。もつとも、結婚することだけが幸せでないとの考えで、妻とは考えにずれがあった。

英子の姉のたま代の孫息子が、進学率の高い難関の私立中学に入学した、との知らせがあった。

「優一朗君が、共成中学に受かったそうじゃないか。お祝いがあるのじゃないか」

「いつも、こちらは出す一方。姉さんたら、孫が三人もいるのよ。やれ、七五三、それ、入学って大変だったんだから。年金生活なんだから、こちらで、詩織に頑張ってもらって、もととらなきや」

「もとをとるとか、そんな問題ではないだろう。親戚のお祝いだから気持ちよく出してやろうよ。俺のほうは兄弟に孫もないから、羨ましいくらいだよ」

徹は鷹揚に構えている。

詩織は毎日、仕事が忙しく、親子でゆっくり話をするのは、休日くらいである。店の定休日である月曜日のこと、英子が言った。

「この前、苺屋の前で久しぶりに上村さんにあつたわ」

「上村さんって、敦子のこと？」

「いや、お母さんのほうよ。敦子さんから頼まれて、苺屋の苺ケーキをわざわざ買いにきたんだって」

「そう、あの店の苺ケーキ、美味しいって評判だからね」

「それが小学校に上がる女の子を連れてるのよ。お孫さん。敦子さんの娘さんなのよ」

「敦子、確か、小学校の先生だったよね。勉強してもらえるからいいよね」

「孫と手を繋いでいるのを見て、羨ましかった」

「また、その話。早く結婚しろというの」

「いい人いないの？ 女は結婚が一番よ。私は生むのが遅かったけれど、それでも、今の貴女の年のときには、貴女は幼稚園の年長さんだったわ」

「そういうのは、『昭和の発想』というのよ。たまの休みなんだから不愉快な話をしないでよ」

といいながら、二階の自分の部屋に向かって音を立てて、階段を上がっていった。

それを横で新聞を読みながら、聞いていた徹が言った。

「そっとしておいたら。その気になれば、相手を見つけてくるだろう。心配することないよ」

「あの子の職場、女ばかりよ。婦人服を扱っているのよ。いったいどこで見つけてくるっていうのよ」

「マツチング・アプリとか、合コンとかいろいろ方法があるだろう」

「そんなのは、もっと若い人が利用するものよ。あの子は、もうじき、三十八その年で利用する人なんかいないわよ。四十手前、今すぐに結婚しても高齢出産。それを思うと、今がラストチャンスよ。私たち、もう七十を過ぎているのよ。貴方は来年で喜寿でしょ。それで孫のひとりもないなんて寂し過ぎるわ世の中、不公平だわ」

「孫がないから、世の中は不公平というのは理屈がよくわからないな」

「男と女が出会い、結婚して、子供を作る。それが自然の摂理というものよ」

「結婚するとか、子供を作るとか、それはその子の自由だよ。親がこうしろ、ああしろと決めるものでもないよ」

「また、評論家のようなことを……。貴方、孫が欲しくないの」

「出来るなら出来たほうがいいよ。でも、人は人だよ。世の中には、孫のいな

い人、いや、子供のいない人だってたくさんいるよ」

「もう、いいわよ。私の努力で絶対に相手、それも敦子の気に入る人を探してくるからね」

と、勝算があるのかないかしらないが言いきった。

英子は大学時代の友人の杏子から代理見合いで相手に巡り合い、息子の結婚が決まったという話を聞いた。それで、杏子に会って、代理見合いというのはどんなものなのか、聞いてみようかと連絡を取った。指定された渋谷の喫茶店に行くと先に来て待っていてくれた。英子はテーブルを挟んで座ると言った。

「おめでとう。息子さんの結婚が決まったとのこと、本当に羨ましいわ」

「そう言えば、英子の一家と私たち、一緒にキャンプに行ったことがあったわね。うちの秀一が幼稚園の年長組だった」

「そうそう、うちの敦子が年少組で、貴女の息子さんを慕って『お兄ちゃん、お兄ちゃん』と言いながら、後ろから後を追っかけていたのを思い出すわ。あれから何年経つのかしら」

「うちの息子が今年、四十でしょ。すると、三十四年ということよね。お互い、年をとるはずだよ」

「本題に入りたいけど……」

「そうそう、『代理見合いとはどんなものか』っていう話を聞きたいってことだったね。一口で言えば、忙しく時間もないし、出会いの機会の少ない子供に代わって親が親同士、お見合いをするというものよ」

「へえ、親同士が。そこで結婚相手を決めるの」

「いくらなんでも、それはないわ。私が利用したクラブでは、まず、子供の簡単なプロフィールを指定用紙に記入してそのクラブに送るの。それには写真はつけないの。ここからがスタート」

英子は話に引き込まれて尋ねる。

「それで」

「後日、見合いの当日の参加者全員のプロフィールの載ったリストが送られてくるの。しかし、各人の情報は一行分しかない簡単なものよ。もちろん言ったように写真はないから人となりは少ない情報から推測するしかないんだけどね」

「プロフィールの情報って、どんなものなの」

「子供の年齢や住所、住所といっても都市の名か。せいぜい区名くらい。それ

と学歴、職業、趣味、身長、喫煙、転勤、結婚歴などかな。学歴も『大学卒』と『大学院卒』かそんなレベルよ。職業も会社員とか、医師くらい、なかには詳しく書いている人もいるみたいだけれど。あ、そうそう。名前は書いてない、ただ番号が振ってあるだけ。名前はプライバシーの肝だから、この段階ではまだ明かさないわけよ」

英子はますます興味を誘われ、引き込まれるように訊く。

「それで」

「リストの情報を頼りに会ってみたい人、といっても本人ではない親のほうだけれど、の番号に○をつけておくの。この○をつける時に、必ず、子供と相談するのよ。これをやっておかないと後々、面倒なことになるからね」

英子は、反抗的な、詩織が協力してくれるか、懐疑的になったが、徹に説得してもらうしかないと思い、話の続きを聞くことにした。

「そのリストをお見合い当日、持っていくのよね」

「そうだけれど、リストとは別に写真入りの詳しい情報の入った身上書を何部か用意して、お見合いの当日、持っていくわけ。相手と交渉してうまくいけば、身上書を交換して持ち帰り、お互いに付き合う意志があれば、親付き添いのデートからスタート。うまくいけばふたりだけの交際が始まるわけ」

英子はここまで聞いて、もう結婚は決まったようなものだと思観的な気持ちになった。敦子はまだ三十代、器量も十人並み以上だし、名の通った大学を出ているから学歴も申し分ない、引く手あまただと思った。

「杏子の息子さんはラッキーね。すぐに決まったんでしょう。なにせ、国立大学を出ているから」

「とんでもない。三十五になって始めたから足掛け、六年よ。何回、見合いしたか数えきれないわ。応募者のなかには医師や本郷大学などでも大勢いるので、うちの息子なんか、とてもとても。本人も四十で決まってラッキーだったと言ってるくらいよ」

英子は詩織のことを思い浮かべながら言った。

「息子さんは協力的だったの。『親が結婚相手を選ぶなんて恰好悪い』という人もいるのじゃないの」

「うちの息子は三菱電機の研究所で働いているでしょ。周りに女性もいないし、出合いの場もないし、積極的に行動するタイプでもないの、私が持ちかけたら『父さんと母さんに任すよ』とあっさり同意したわ」

英子は六年と聞いてすばやく計算した。六年もかけていると詩織は四十三に

なってしまう。超高齢出産になるので恐らく子供は生まないだろう。それでは孫の顔が見れない。とにかく急ぐことだ。

英子は帰ってさっそく、徹に相談した。

「一番のネックは本人だな。恐らく『勝手なことするな』と言うじゃないか。説得できてもトントン拍子に結婚まで進むかな」

「何を言っているの。私は貴方に説得役をお願いしているのよ」

「自信ないな」

「頼りないんだから。しっかりしてよ。ここは親の出る幕よ」

徹はすずごとと引き下がった。年金生活で特段することのない徹はどうやって詩織を説得するか、一日中、思案した。いよいよ、店の定休日である月曜日がやってきた。詩織の機嫌のよさそうなのを確認して切り出した。

「代理見合い、というのを聞いたことあるか」

「代理見合い？ どこかで聞いたことがある、子供の代わりに、親が見合いをする、というやつだよ。ああ、思い出した、テレビの特集で『少子化対策の特効薬』とかなんとか言ってたね」

「そうだ、それなんだ」

「ははあくん、わかった、わかった。お母さんが言い出したんでしょ。説得役をお父さんに頼んだんだ。顔に書いてあるよ」

徹は詩織が怒りだすと思っていたが意外だった。しかし、油断は禁物、マガがいきなり噴き出さないと限らない。

「どうだ。俺は結婚しないことも選択肢のひとつと思っているので強制するつもりはない。しかし、母さんは、『自分たちがいなくなった後、詩織はひとりで生きていかなければならない』と思うと死んでも死にきれない、というんだ」

「随分、大きなことをいうのね。そうなのかな、私に結婚して欲しい。それって早く孫の顔が見たいからじゃないの」

「いやいや、それはない。代理見合いというのはそうそう簡単に決まるものではない。数年ざらにかかるよ。孫のことなんかは頭にないよ」

徹は、見合いが決まる頃には出産適齢期をとくに過ぎて孫どころではないと暗に言ったつもりだった。もちろん、英子は孫を決してあきらめたのではなかった。ちよつとの間、詩織は考えていたが、ぽつりと言った。

「親孝行だと思ってお母さんに協力してあげるか」

徹は思わず、「自分のことだろう、協力してあげる、とは何を考えているのか」と言いそうになったが、事をスムーズに運ぶため、言葉を飲み込んだ。また、意外な展開にびっくりした。

「そうしてくれるか。母さん、喜ぶぞ」

「ただし、もし、結婚したとしても私の仕事を優先させること。仕事はなにがあっても続けること。家事は平等に分担、これが絶対に譲れない条件よ」

実は、詩織のまわりで伏線となる出来事があったのだった。

詩織の店のパートさんの菅谷桃子がおじいちゃんの葬儀から帰ってきたが元気がないので訊いてみた。生まれた時から可愛がってくれたおじいちゃんが『俺の元気なうちに桃子にいい人を見つけてやりたかった。桃子が将来、ひとりで生きなければならぬと思うと死んでも死にきれない』と周りのもの言って亡くなったそうである。おじいちゃんが桃子の若い頃、「どんな人のお嫁さんになるのかな」と聞いたところ。「私はお嫁なんかいかない」といったらしい。それをずっと覚えていたというのだった。それを聞いて、おじいちゃん子だった彼女は遺骸に縋りついて泣いたそうだった。それに詩織は何事につけ新しいことにチャレンジすることが好きだった。

英子は詩織がその気になってくれたことにほっとした。早速、活動を開始した。まず、杏子の利用したクラブを紹介してもらった。すると簡単なプロフィールを書き込む用紙が送られてきた。やるからには、絶対に相手を見つけることだとの心意気で、徹は書店で「代理見合い・成功の秘訣」という本を見つけて買ってきた。英子、徹と詩織の三人で相談しながら、用紙に記入していくことにした。

本によると、プロフィール紹介は出来るだけ、いいように解釈できるように書くこと、都合が悪いことは曖昧に書くことなどと注意点が書かれてある。これでは、狐と狸の化かし合いだ。

英子が言った。

「職業欄は、店長というのはどうかしら」

徹が反対する。

「店長なんて書くと忙し過ぎて家事がおろそかになると思われるぞ。アパレル関係の会社員でいいんじゃないか。アパレルならファッションのセンスがありそうに見えるよ」

詩織は言う。

「いや、婦人服販売・社員でどうかしら」  
英子が訊く

「随分、具体的だわね」

「これなら、決してもてなかったわけではなく、男性に接する機会が少なく縁がなかっただけと相手が思うじゃない」

「じゃあ、それで行くか」

徹が言う。

「ひとり娘というのも気になるなあ。将来、親の面倒を見なければいけない。下手をしたら、両親と同居することになるのでは、と思われる。敬遠される可能性が高いぞ」

詩織は言う。

「だって、嘘を書くわけにもいかないし。こういうのはどうかしら。特記欄に『年金生活の両親は物価の安い東南アジアに移住の予定』って」

「おいおい、俺はそんなところに行くつもりないぞ」

「結婚したら『海外移住の話は先延ばしになった』と言えばいいんじゃない」

「それじゃ、詐欺だろう」

「お見合いなんてそんなものよ。狐と狸の化かし合いだもの」  
傍でふたりの会話を聴いていた英子が感心したように言った。

「詩織もよく悪知恵が働くわね。でも、とにかくリストをみて、番号に○をつけてもらわないと、身上書の交換に辿りつけないから、多少の嘘も仕方ないわね」

ひとつ、ひとつ、話し合いながら埋めていったので、必要事項をすべて記入するのに、半日かかった。

一週間ほどすると、代理見合い参加者本人ではなく参加者の子供のプロフィール・リストが送られてきた。息子を持つ親が五十組、娘を持つ親が四十六組とある。「組」というのは、両親揃って参加する親が多いからだ。

これは、という男性に印をしていくことになった。

リストを見ながら徹が言う。

「年齢は三十才代前半から四十代がほとんどだが、五十代も何人かいるよ。しかも初婚と書いてある。五十代というとその親御さんは八十代だろう。大変だな、そんな年で息子の嫁探しとは。ニュースで『結婚しない人が増えた』というが、改めて実感するね」



英子が言う。

「何を感じているの。他人事ではないのよ」

徹は意外そうに言った。

「お医者さんもいるね。医者は収入がいいから、お嫁さんがすぐに見つかりそうだけど、そうでもないのかね。医者も悪くないよな」

詩織がさえぎる。

「お医者さんは嫌だよ。仕事を辞めて専業主婦をやれ、と言われそう。条件は、転勤のない人、共稼ぎ可、親との同居不可、年齢は、四十代前半までね」

徹が言う。

「おいおい、条件が厳し過ぎるぞ。もつと間口を広げたほうがいいぞ」

こうやって、選考が始まった。あれがいい、これがいいといいながら、最終的には四人を選んで、印をつけた。それは詩織の希望する条件にあった公務員、企業の研究者、警察官、教員だった。

いよいよ、代理見合いの当日である。会場は大きなホテルの一室だ。部屋の入口で名前を言い、息子を持つ親はブルー、娘を持つ親はピンクの番号札を胸に付けてもらう。なかにはブルーとピンクの両方の札をつけている夫婦もいる。息子と娘の両方の相手を探してきただろう。お互いに挨拶を交わす親御さんもいる。何回もチャレンジしてこれまでにどこかの会場で会ったことがあるのだろう。

まず、係の人が見合いの進行方法を説明する。

徹と英子はリスト上の詩織の番号、14の貼ってある長テーブルに座った。テーブルを挟んで椅子がふたつ用意してある。詩織と交際してみたいという男性の親御さんがその椅子に座って、交渉するのである。

まず、最初の八十代とみられる老夫婦が徹と英子の前に座った。胸につけている番号は9だ。詩織の絞り込んだリストには○はついてない。夫のほうが口を開いた。

「いかがでしょう。お宅のお嬢さんとうちの息子、息子は銀行員で収入も平均よりずっと高いし、マンションのローンも払い終えており、経済的に苦労させられることはありません」

徹がリストの9番の所に、目をやると、年齢が五十三才とある。娘と十六も違う。これはアウトだろうと英子の方を見ると、首を横に振っている。

「せっかくですが、年が違い過ぎるので、うちの娘にはちょっと……」

と徹が断ろうとすると、妻のほう慌てて言う。

「十六の年の差なんてぜんぜん問題ないですよ。芸能人なんてもっと年の差のある夫婦がいくらでもいます。それにうちの息子は年より若く見えますから」と言いつて身上書の入った袋から写真を取り出した。

徹は、芸能人と比較するとはずうずうしい奴だ、と思った。写真を見ると、頭の頂部が少し薄くなりかけている。何が若く見えます、だ。自分の子供を過大評価するのは親の常なのかもしれない。

黙っていると。夫のほう哀願するように言った。

「なんとか、身上書を交換させて頂けないでしょうか」

「済みません。御縁がなかったようです。でも、きっと素敵な方と巡り合えますよ。お互い頑張りましょう」

徹は本に書いてあった断りのフレーズを復唱した。

あと、四人ほど並んでいたが、リストに○をつけた候補はひとりも現れなかった。すべて断った。○をつけた候補になんとか身上書を交換してもらおうことだ。しかし、最初に応対した番号9のように、哀願しなければいけないのかと思うと憂鬱になった。

今度は息子を持つ親と対応する番だ。攻守交代で長テーブルには息子を持つ親御さんが並んでいる。まず、第一本命、5の札の貼っているテーブルに向かった。四十才、職業は企業の研究者、持ち家あり、共稼ぎ希望、三男、両親は地方在住で長男と同居と有望株だ。皆、考えることが一緒だ。既に六、七人並んでいる。順番を待つ間に後ろにも列が出来ている。順番が回ってきて、次の番になった時に、声が聞こえてきた。

「済みません。うちは年齢制限を設けています。三十三才以下でないといちょっと……」

「うちの娘は三十六です。お宅の息子さんとも年が近いので話もよく合うのではないのでしょうか」

「いや、健康な孫を産んでもらわないと困ります。三十六才と言っても出産の時には三十八才くらいにはなっているでしょう。となれば、高齢出産の部類です。果たして、丈夫な子が生まれるかどうか……」

「ずけずけと言われて、相手はさすが引き下がった。」

「そうですか。分かりました」

あとはきまり文句のフレーズで断られ、老夫婦は肩を落として席をたった。

これを聞いて、徹は英子とそっと列を抜け出した。うちの娘はそれよりも、さらに年上だ、とても勝算はない。

あとの○に対して粘るだけ粘ったが身上書の交換まではいかなかった。やはり、年齢の壁だ。こればかりは誤魔化しようがない。

目当ての相手の交渉に失敗しても、敗者復活戦がある。参加者がお互いに交渉しあうのだ。

徹、英子の前に現れた老夫婦、ふたりとも八十代に見える。夫が口を開いた。「これまで同居していた息子と孫の食事の用意とか身の回りの世話をしていた妻がだんだん、体が弱ってきたので、我々、夫婦は老人ホームに入居の予定です。それで息子と孫のために来て頂けないでしょうか。息子は証券マンで収入がいいので、共働きの必要もありません。遊んで暮らせます。息子は毎年、海外旅行に行ってますので世界中、見て歩けるでしょう」

孫と聞いて、徹と英子が思わず顔を見合わせて、英子が訊いた。

「お孫さんがいらっしゃると言うことは、再婚ということですか。奥さんはどうされたのですか」

妻の方が答えた。

「子供を置いて男を追いかけて家を出ていったんですよ。息子が自分で見つけてきた嫁ですが、息子に見る目がなかったということでしょう。孫は小学五年生ですから手はかからないですよ」

リストを見ると、息子の年齢は四十九だった。徹は思った。嫁さんに逃げられるような男だ、ろくなヤツじゃないだろう。単に家政婦が欲しいだけじゃないか。随分バカにした話だ。

その後、数組の夫婦と交渉したがどれも芳しくなかった。誰でもよいのなら身上書を交換してもらえたが、それでは意味がない、結局、身上書を一枚も交換してもらえなかった。三十七才の女を目当てに交渉しようとするのは初婚の五十代、子持ちのバツイチの四十代、容姿が劣ったり、肥満の男など、いずれも訳あり物件ばかりだ、ということが分かった。

代理見合いにあたって結婚偏差値というものがある。それは、容姿、年齢、年収、出身大学の名前、勤務先、兄弟の数、親兄弟の出身大学、住んでいる場所、身長、体重、離婚歴、親の職業、親の財産、親と同居の可否などで決まる。学校の受験の偏差値は本人の努力で改善できる。しかし、結婚偏差値は本人の

努力、いや、親が努力してもどうにもならないものに左右されるのだ。厳しい現実があった。

徹は詩織にどう説明するか気が重かった。むしろ、「代理見合いなんかは止めてくれ」と言われたほうがかえって気が楽だった。

徹と英子は詩織に結果を説明した。詩織は落胆した様子もなく言った。

「私のために、いろいろやってくれてありがとう。いやな思いをさせてかえって悪かった。でも、私にとっても勉強になったわ。現実には甘くないってことよね。理想の相手とは結婚偏差値を上げることが出来なければ結婚できない。結婚したかったら、自分の偏差値に近いか、それ以下の相手を選ぶしかないということよね」

一呼吸置いて、徹が言った。

「そういうことだな」

「努力すれば努力した分、偏差値が上るのなら『偏差値をあげていい相手を見つめよう』と思うだろうが、それが無理なら、なにもそこまでして結婚することはないわ。少なくとも、結婚したいな、と本気で思うようになるまでは」

それまで無言だったが、英子もポツリと言った。

「私が世間知らずだったのかも。代理見合いでうまくいったと聞いて、飛びついたけれど、足掛け六年かかったということからそれなりの努力をしてきたのよね。そう簡単なものではないということよね、結婚まで行きつくには」

徹が諭すように英子に言った。

「そうだよ。人はうまくいったときの話はするが、うまくいかなかったときの話はあまりしないものだ」

詩織が言う。

「今は仕事が楽しいので感じないけれど、伴侶が欲しいと思うようになったら自分で探すわ。伴侶が欲しいと思うようになった時が私の結婚適齢期ということじゃないのかしら」

英子は黙っていたが、徹は詩織をサポートした。

「一度しかない人生だ。将来、悔いの残らないようにすればそれでいいと思うよ」

それ以降、英子は詩織に「早く結婚しろ」とか「孫の顔が見たい」など一切、言わなくなった。忙しいが楽しそうに働いている詩織を見て、必ずしも結婚し

た者だけが勝ち組ではないことを悟ったのだろう。仕事に励む詩織は、今より大きな店舗の店長を任せられることが決まった。同期の出世頭だった。

(了)